謹賀新年　シャンパンで乾杯といきましょう

「シャンパンラグビー」30 年程前に議論をした懐かしい言葉が最近とりあげられています。日本代表チームにフランス人コーチを招き、指導の中でパスによる展開が弾ける泡を連想させるから生まれた言葉ということで紹介されています。「泡」を特筆するだけではせっかくの言葉も消化不足で、日本ラグビーの後進性排除につながらないとおもいます。

単に泡だけならば「ビール」でもよいわけです。フランスといえば何といっても「ワイン」です。ビールでもなく、ワインでもないのは、それだけの理由があるからです。ラグビーの内容と、言葉の豊かな内容が重なっている事を認識しなければなりません。

まず champagne シャンペインとアクセントを後ろにおいて英語で発音して、安易に言葉を訳さないことから始めたことを覚えています。そして他の飲み物と比較することから始め、度合い、色、匂い、味、コクそして泡の出具合いと飲み方も話題になりました。

次に認識しなければならないことは周囲の環境です。社会の産物であるラグビーも当然環境の影響を受けます。イングランドはラグビーの母国であり、5 ケ国対抗の盟主です。フランスもヨーロッパの大国で小さく収まっているわけにはいきません。アングロサクソンはドーバー海峡をこえて渡って行きましたが元は欧州大陸で、既に地下でつながっています。ナポレオンは広大な地域を制服しました。今日フランスは EU の主導国です。ラグビーに関しては、エリスの墓はフランス西海岸の町にあって、イングランドが移墓を申し入れても応じないという現実もあります。突っ張っているわけではないのですが、対抗意識の強さは当然のものです。総括的に後進国ではありません。

もっとも重要なのは、ラグビーの内容とその比較です。最終的には、BK の間隔が狭く、走るコースがより縦であるということが結論づけられました。これらは、FW が獲得したボールを「FW からあまり離さない」ということと、間隔が狭い方が「パスをする者にとってプレシャーが小さい」ということが基底にしているということが分かりました。この 2 つのことはゲームづくりに根幹に係わる重大なことで、伝統的ラグビーとの違いです。

BK の走るコースは、真正面から 20 度から 30 度外目に走るものという規定概念から脱却し、相手ゴールにより近い縦目のコースがよいと当然の如くに考えられ、当時の一般的なラインより少し浅い目のラインを採りいれているのも研究の対象となりました。局面的には、近くにいる味方にポンポンとパスが渡りながら相手ラインにグスッと突き刺さり突破する様子を、「三つ矢サイダー」の商標になぞらえて表現するという言葉の遊びもありました。サイダーはシャンペインの味の深さとは違いますが。ボールを持っている者を先頭に、左右の味方と連係をとりながら真っ直突き進んでくるフランスチームは最強でした。

シャンペインラグビーはフランスラグビー界の苦労と努力の結果対抗軸としての産物です。短絡的に解釈して真似てもできるものではありません。理論と努力をまなんで、全てのチームが handling game であるラグビーの方向付けを確かなものにしたときに国の代表チームが本当に強くなり、明日の日本のラグビーを創出できるものだと思います。

世界で愛されているシャンペイン、英国王室も認めている「ポル・ロジェ」で乾杯。

2006.01.07
西川　義行